

東京電力
福島第一
原子力発電所事故
被災者応援金

パルシステムは 原発事故の避難者・被災者を これからも応援していきます。

年月の経過とともに公的支援が先細り、不安な生活を送る被災者や避難者は多くいます。パルシステムでは2011年から、東日本大震災や東京電力福島第一原子力発電所の事故で被害にあった方々を応援する活動を継続中。当時の記憶が次第に薄れていくなか、今でも多くの被災者支援団体がひたむきに活動を続けています。



山田 優太さん(仮名)
福島県楡葉町出身。24歳。
現在は大学院で検査技師の
勉強に励む。「福島子ども
こらっせ神奈川」で子どもの
サポートボランティアにも参
加している。

寄り添い
続けられる
つながりを。
あの日から12年。
いま、ひとりの若者が
考えること。

小学6年のときに東日本大震災に遭遇した男の子が、12年を経て、いま医学の道をめざして勉学に、ボランティアに励んでいます。彼が感じた避難の日々、これからの社会に必要なこと、を語ってくれました。

「安全安心って、なんだったんだろう」

「あのときは、突き上げるようなものすごい揺れで立っていられなくて。みんなパニックでした」
そう当時を振り返るのは、仙台の大学院で検査技師の勉強に励んでいる山田さん(仮名)、24歳。東日本大震災発生時は、生まれ故郷の楡葉町の小学校に通う6年生でした。

そして、町からおよそ20キロ北にあった東京電力福島第一原子力発電所が爆発。山田さん家族を含む町民全員が、着の身着のままの避難生活を余儀なくされたのでした。

「福島県内の体育館や旅館、仮設住宅を数えきれないほど転々しました。中学入学のときは会津にいました。でも1週間でもた転校したんですけどね……。楡葉にいたときは原発って安全だ、安心だって聞いてたんですけど、あれはなんだったんだろうなあ、って思った記憶があります」

長引く避難生活。次第につのる孤独感

「結局、同じ沿岸部のいわき市の仮設住宅に落ちて、そこで6年間、家族5人で暮らしました。父は原発関係の仕事をしていましたが、震災後は退職したものの廃炉の作業員が寝泊まりする宿舎で仕事をしていたり、原発までの送迎バスの運転手をしたこともあったかな」

決して広いとはいえない仮設住宅の中で多感なときを過ごした山田さん。友人関係、恋愛、将来のこと、家族とのこと。悶々と思いを悩むことも多々ありました。「中学のとき、不登校になったこともあって。お金のこともあったのかな、ちやうど両親が離婚直前まで関係が壊れかけて。家に



いわき市内の仮設住宅で家族と



ボランティアスタッフとして福島の子どもたちと

居場所がないっていうか、だんだん孤独になっちゃったんですよ」

そんなとき、同級生から神奈川県の「福島子ども・こらっせ神奈川」が主催する保養プログラムへ誘われます。2泊3日の久々の旅。不安と期待で訪れたそこでは、地元の温かい大学生たちの出迎とともに、離れ離れだった級友たちとの思いがけない再会が待っていました。

「うれしかった。ずっと溜まっていたものが一気に噴き出して、夜、消灯してからもふとんに入りながら、バラバラだった毎日のことをお互い話しまくって。それをきっかけにちよつとずつ孤独から脱出できたんです」

寄り添い、声を聞き、 あたたかく気遣える関係へ

いま山田さんは「こらっせ」の大学生メンバーとして、福島県の子どもたちのサポートにボランティアで取り組んでいます。

「もどかしさを抱える彼らの気持ちが自分なりにわかる気がして。かわいそうだから支援する、じゃなくて、いま悩んでいることを聞く、辛いことを聞く。どれだけ寄り添い続けられるか、が大事かなと思ってます」

山田さんが医学の道を志したのは、6歳下の弟さんの存在が大きかったといいます。

「生まれたときから四肢麻痺の脳性麻痺なんです。いい弟ですよ。家族みんなで支え、地元の人たちにも支えられていました。避難生活中も周囲の方々にはあたたかく気遣ってくださいました」

だからこそ、どうしたら不自由なくらしをする人たちの力になれるのか、山田さんのなかではテーマだといいます。

「パルシステムさんを含むさまざまなご支援もあって、私たち被災者はこの11年間、暮らすことができました。でももしかしたら、まだまだ孤独に思い悩む方がいるかもしれない。新たな寄り添いが、この応援金を通じて生まれるなら、私も弟もうれしいです」

パルシステムのオウンドメディア「KOKOCARA」では震災から11年を迎えた各地の声をレポートしています。併せてご覧ください。



避難者・被災者を支援する多くの団体の活動に組合員の募金が活かされています。

2022年度は17団体に1,040万8,600円をお届けしました（累計の支援総額は3,821万5,595円）。各団体の活動内容をご紹介します。

認定NPO法人 Dialogue for People（東京都）

東日本大震災以降、東北の被災地の取材を続けています。震災から11年以上経った今でも、地域によって様々な課題があります。福島県沿岸部では、原発事故の影響により、いまだに人の居住できない「帰還困難区域」が残っています。2022年7月11日には「震災から11年、福島県双葉郡のいまを知る ～D4P Report vol.3 福島取材報告会」と題したイベントを開催し、復興の意味や、原発事故との向き合い方について考えていきました。パルシステムの応援金のおかげで継続的に福島の取材・発信活動を行うことができていること、心より感謝申し上げます。（代表理事 佐藤慧）



福島からゲストを招き、2022年7月に東京で開催したイベント



福島県富岡町のようす。奥に見えるのは第二原発の排気筒

<p>震災ストレス研究会 (福島県)</p> <p>震災および原発事故による被災者が、受けたストレス体験を語るシンポジウム開催にかかる講師謝礼や広報・記録のための費用。</p>	<p>認定NPO法人 いわき放射能市民測定室たらちね (福島県)</p> <p>出張甲状腺検診の広報費や人件費など諸費用。また、子どもや子育てする保護者の心のケアを専門家と連携し取り組むための広報費。</p>	<p>NPO法人 ハートフルハート未来を育む会 (福島県)</p> <p>福島県内に住む子どもや保護者を対象とする、親子遊び・親ミーティングへの心理士・保育士の派遣費、また勉強会の講師謝礼など。</p>	<p>NPO法人 ふよう土2100 (福島県)</p> <p>郡山市内の支援学校や支援学級に通う子どもたちとその家族を対象に、通所施設の環境整備費用や、野外体験時の活動費、食事支援費用。</p>
<p>TEAM毎週末みんなで山形 (山形県)</p> <p>豊かな自然の中で心身のリフレッシュを図るため、コロナ対策を講じて短期で実施する小規模保養にかかる宿泊費や交通費などの費用。</p>	<p>ECO village SHELTER project (新潟県)</p> <p>自然体験を通じたりフレッシュが目的の保養キャンプの開催や、野営利用の受入れに関する食材や備品の費用、企画運営費など。</p>	<p>一般社団法人 ふうあいねっと (茨城県)</p> <p>福島県から茨城県内への避難者を対象に、当事者グループの活動支援や、被災経験を持つ子ども・学生の支援事業のフォローアップの費用。</p>	<p>NPO法人 Annakaひだまりマルシェ (群馬県)</p> <p>3.11事業として取り組まれる「小児甲状腺エコー検査」に関するチラシ製作や広報費、備品等の購入、また検査会場費や検査技師の人件費などの費用。</p>
<p>認定NPO法人 FoE Japan (東京都)</p> <p>保養にかかる野外活動費用やPCR検査費用、また被ばくの影響による健康不安を共有できる場づくりに関する施設維持費や光熱費など諸費用。</p>	<p>認定NPO法人 沖縄・球美の里 (東京都)</p> <p>沖縄久米島での学童保養や母子保養、ファミリー保養に伴う諸経費。またニュースレター等で、保養の必要性を伝えるための報告にかかる費用。</p>	<p>NPO法人 新宿代々木市民測定所 (東京都)</p> <p>放射能測定業務に関わる経費（検体代金や運賃など）。また、子どもたちや保護者を放射線被曝から避けるため、測定結果を広報するための費用。</p>	<p>東日本大震災復興支援 松戸・東北交流プロジェクト (千葉県)</p> <p>松戸に住む被災者らを対象とした被災状況を学ぶツアーにかかる費用や、防災の大切さを伝える「出張防災井戸端会議」の運営費用など。</p>
<p>福島の親子とともに・平塚 (神奈川県)</p> <p>長期休暇中の保養受入や自主保養への補助、講演会経費、神奈川県内の避難家族への生活費補助、福島原発事故かながわ訴訟団の支援。</p>	<p>福島子ども・こらっせ神奈川 (神奈川県)</p> <p>神奈川県内大学生を対象に実施する「福島応援・スタディツアー」の費用や、福島の子どもや若者をテーマにした講演会の講師謝金や広報費。</p>	<p>福島の子どもたちとともに・西湘の会 (神奈川県)</p> <p>過去の保養以降継続して交流を続ける、特に避難者の子どもたちや保護者を対象とした甲状腺検診にかかる医療費や宿泊費などの補助。</p>	<p>みんなのおうち公園 保養の家 (山梨県)</p> <p>福島県のNPO法人と連携し開催する、被災した子どもに寄贈された本を収める文庫の壁画アートイベントにかかる作業費や資材費などの費用。</p>

被災地の“日常”と“次世代”のため引き続き募金に協力してください。

誰もがくらしやすい社会のため被災地の応援を続けていきます。

運用管理委員長 高橋由美子（パルシステム千葉 運営担当理事）



わたしたちのくらしやいのち、価値観を大きく揺るがした原発事故から12年。当時の記憶が次第に薄れていくなか、避難者や被災者を取り巻く状況も変化しています。パルシステムでは、避難者・被災者の声と組合員の想いをつなぐこと、原発事故を忘れないために、応援金の取り組みを続けています。応援金は、地道な活動をしている支援団体の活動を通して、きめ細かく有効に活用いただいています。これからも、一人ひとりが大切にされ『ささえあう』誰もがくらしやすい社会を広げる取り組みを、組合員のみなさんと続けていきます。

● 2023年度の助成までの流れ（2023年3月末日までに集まった募金が対象です）

- 1 受付** 各生協を通じて申請を受け付け
- 2 確認** 受け付けた団体および金額の確認
- 3 決定** パルシステム理事会で団体・金額の決定
- 4 送金** 決定した団体に応援金をお届け

※残金が発生した場合は翌年度に繰り越します。

現金またはポイントで募金できます。

6桁の注文番号を入力・記入してください。

現金募金 **186601** ポイント募金 **169056**
300円(ポイント)

- 商品のご利用代金とあわせてお支払いいただく「現金募金」と、たまったポイントを1ポイント1円に換算する「ポイント募金」があります。
- 「現金募金」は、上記の注文番号を「6桁商品注文欄」に、口数を「注文数欄」に記入あるいは入力してください。
- インターネットでの「ポイント募金」は、「買い物カゴ（注文内容確認画面）」にある「利用ポイント」より「変更」を開き、入力してください。
- ポイントによる募金のお申し込みでは、保有ポイントの範囲内の口数でお申し込みいただけます。なお、保有ポイントが申し込み口数に満たない場合は、保有している全ポイントが募金されます。
例) 保有ポイントが250ポイントで、300ポイントを1口申し込むと250ポイントが募金されます。
- この募金は、税額控除対象の寄付金ではありません。